

事業家？ 荒木小兵衛



荒木小兵衛は天保十四年四月、川

端通り仁王門下ルの地に生まれている。横井時冬『日本工業史』によれば、「荒木小平織物伝習のために織工場に入り、ジャカード模造を志し、明治九年より日夜其製作に心を砕き、ついに明治十年に至り、百口ならびに二百口のジャカード一台づつをつくることを得たり」とある。その間の苦労は大変なもので妻女とみさんが髪結い仕事を続け資力援助したという。

明治六年にジャカードとその織法が伝えられたが、織機は輸入品であるため、織屋に購入するだけの資力はなかった。

荒木小兵衛の完成したジャカードは木製である。当時はまだ製鉄工業が盛んでなかったとはいえ、洋式機械を日本のなものに捉え直し、木製で安価な機械を考案したあたり、ただの機械工とは思えない。

当初京都府は荒木製ジャカードの

他府県販売をできるかぎり制限したという。小兵衛が府営の織工場でこれを完成したためであろう。織殿が民営となった明治十四年ごろからは、こういう規制もなくなつて、西陣のみならず全国の機業地に競つても認められていく。

そのころ川端仁王門の荒木工場では、鴨川から水を引き、水車を回してジャカードの部品を作っていたといわれている。

さらに小兵衛は織機としてのジャカードだけでなく、紋彫機も模作したことは注目されてよい。明治二十年ごろ荒木製紋彫機は百台にも達していたのである。

佐倉、井上によつてもたらされたジャカードとその織法は荒木製の国産機により、飛躍的に普及していくことになる。それだけに織技術の向上に果した役割は大きい。

外国から移入されたばかりの織機を模作することは当時、勇気のいることだったにちがいない。にもかかわらず、すでにしてその将来性を見透していた荒木小兵衛は、創意の人であると同時に、事業家としての才幹にもめぐまれていたといえる。

(福本武久)